

第 162 回 第一次大戦後のヨーロッパ②

1 第一次世界大戦後のフランス

- ・第一次世界大戦で戦場となったフランスは、荒れた国土の復興やアメリカから借りた戦費の返済を、ドイツからの賠償金に頼った。



ポワンカレ

- ◆ () (第2次) (在任 1922～1924年)
- ・1923年、ポワンカレ右派内閣は、賠償金支払い遅延を口実に、() をさそってドイツの工業地帯 () を占領した。
→ドイツは経済混乱におちいり、フランスは国際的な非難を浴びた。
→対ドイツ強硬策は失敗し、以後は協調路線に転じた。



エリオ

- ◆エリオ (左派連合政権) (在任 1924～1925年)
- ・1924年、() を承認した。
- ・外相ブリアンの努力により、1925年、ロカルノ条約を結んだ。

2 国際協調主義と軍縮

- ・第一次世界大戦での大きな被害に懲りた各国は、協調と平和の維持に努めた。
→ () の中で、戦争を防ぐための条約が結ばれて行った。

- ・1925年、英・仏・独など7カ国が () を結び、相互不侵略や国境の現状維持を定めた。
→1926年、ドイツは国際連盟への加入が認められた。
- ・1928年、フランス外相 () とアメリカの国务長官 () が中心となり、「戦争をしない」という条約がパリで結ばれた (当初15カ国)。
※この条約を () (ブリアン・ケロッグ条約) という。
- ・1927年、ジュネーヴ軍縮会議が開かれたが合意には至らなかった。
→1930年、() が開かれた。
→ワシントン会議で決まらなかった補助艦の保有比率が、ロンドン海軍軍縮条約によって定められた。
※イギリス・アメリカ・日本の保有比率を10・10・7と定めた。
→この決定に対して日本では、軍部や右翼から猛反発が起こった。



ロカルノ条約

スイスのロカルノで結ばれたこの条約は、当時の国際協調の雰囲気を象徴するものである。しかし結果的には、戦争を防げなかった。



アメリカのケロッグ国务長官

クーリッジ大統領の国务長官を務めた。国务長官とは、日本ではいう外務大臣 (外相) にあたるものである。



フランスのブリアン外相

この不戦条約は、後に63カ国が調印し、日本も参加した。憲法第9条は、この不戦条約の第1条をモデルとしたものである。

3 ソヴィエト連邦の成立

・1922年、ソヴィエト政権はドイツとの間に（ ）
を結び、国交を回復した。

☆（ ）（1922～1991年解体）

都…（ ） ※現在はロシアの首都

- ・1922年、（ ）、（ ）、（ ）、（ ）の4国は、連合してソ連を結成した。
→後に他の共和国も加わり、全15カ国となった。
- ・1924年、ソヴィエト社会主義共和国連邦憲法が制定された。
- ・1924年にイギリス、イタリア、フランス、1925年には日本がソ連を承認した。

1922	ドイツ	第一次世界大戦後、国際的孤立状態 ラバロ条約 独ソ国交回復
1924	イギリス	(第1次マクドナルド労働党内閣の時)
	イタリア	
	フランス	
1925	日本	(同年、治安維持法の制定)
1933	アメリカ	(フランクリン・ローズヴェルトの善隣外交政策)
1934	ソ連の国際連盟加入	

○新経済政策(ネップ)の評価
○市場進出への期待

4 レーニンの死とスターリンの独裁

・1924年、ロシア革命以来の指導者である（ ）が死去した。
→世界革命論を唱える（ ）と、（ ）を唱える（ ）が対立し、後継者争いが起こった。



レーニンの死

レーニンは、1923年に発作(おそらく動脈硬化が原因)を起こし、政治の表舞台から退いていた。遺体は防腐処理され、現在も展示されている。



トロツキー

VS



スターリン

レーニンは、トロツキーについては「有能だが、自己過信しすぎている」と評し、スターリンについては「粗暴すぎる。解任するべき」と評していたとされる。

- ◆（ ）（1928年ころ権力掌握～1953年死去）
- ・スターリンは、トロツキーら対立する勢力を追放し、指導者となった。
→その後、ブハーリンら実力者を次々に逮捕・粛清し、1930年代初頭には完全な独裁者となった（スターリン体制）。
→反対派は強制収容所におくられ、少数民族にも強制移住を行った。
- ・1928年、（ ）で、本格的な社会主義計画経済がはじまった。
→集団農場の（ ）や、国営農場の（ ）が建設され、農民の集団化がすすめられた。
→重工業を優先したため工業力はあがったが、消費物資が不足して国民の生活は苦しくなり、多くの餓死者も出た。



消されたトロツキー

第158回のプリントにある写真と比べてみよう。スターリンは、トロツキーの写真を修正して消し、レーニンの側近というイメージをなくそうとした。



コルホーズのポスター

コルホーズでは、土地・農具・家畜などが共有とされていた。富農は厳しく弾圧され、多くが収容所に送られた。



ソフホーズ

ソフホーズでは、土地や農具は国有とされ、農民は給料をもらって働いていた。生産する作物や買い上げ価格まで、すべて政府が決めていた。